



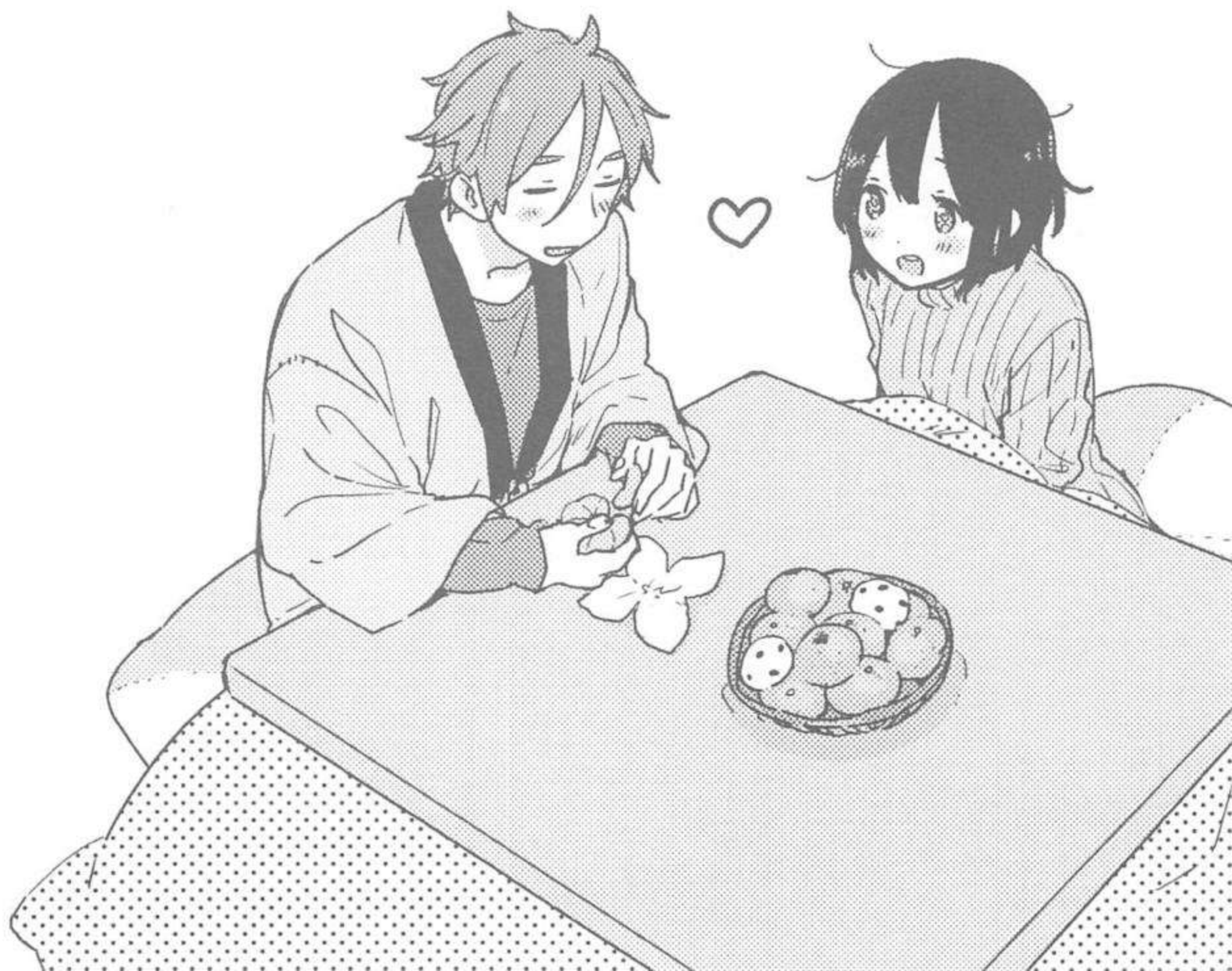
# Hearty Orange

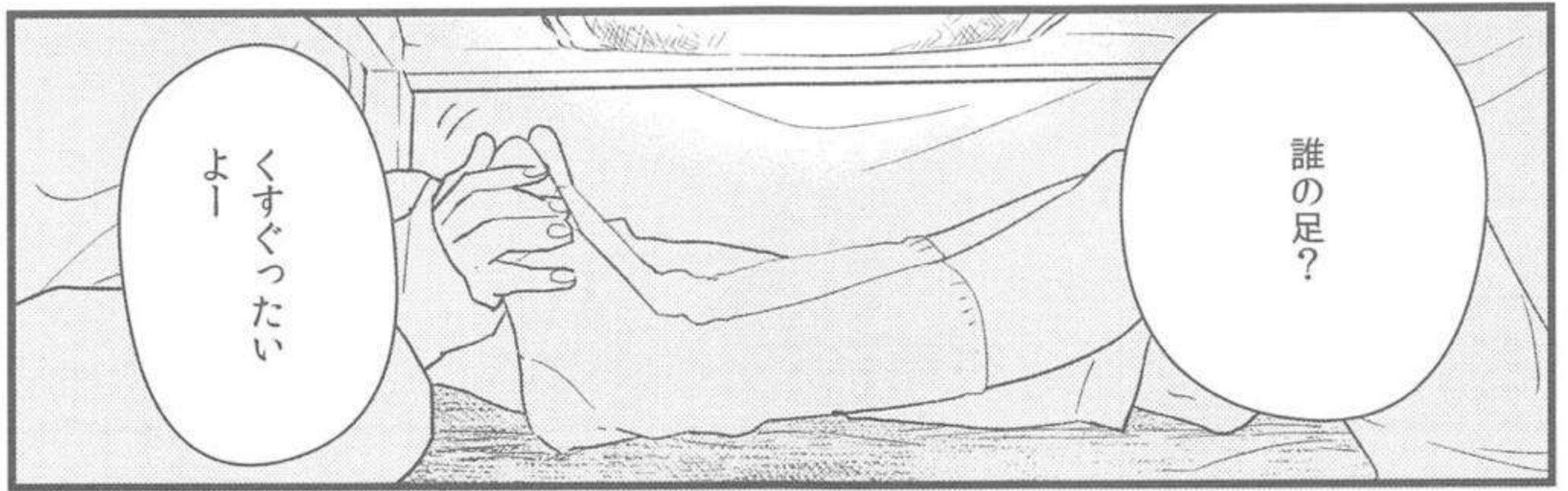
mechirama Fanbook  
Issued: 2014 winter

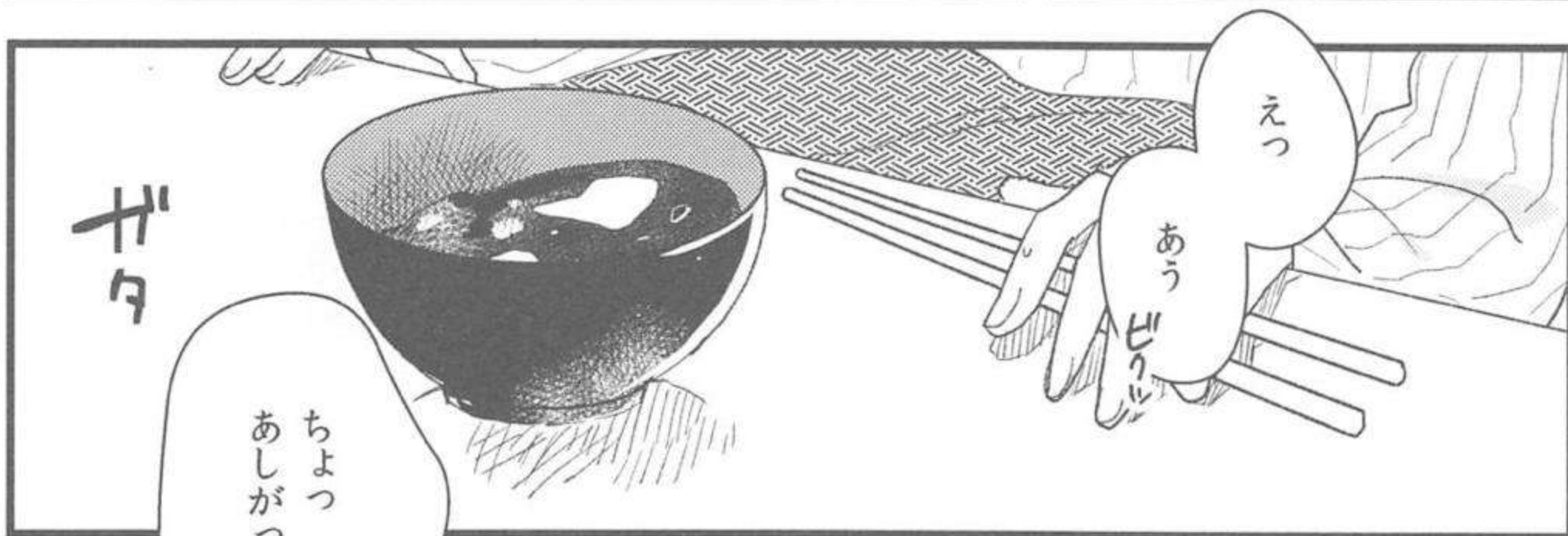
R18

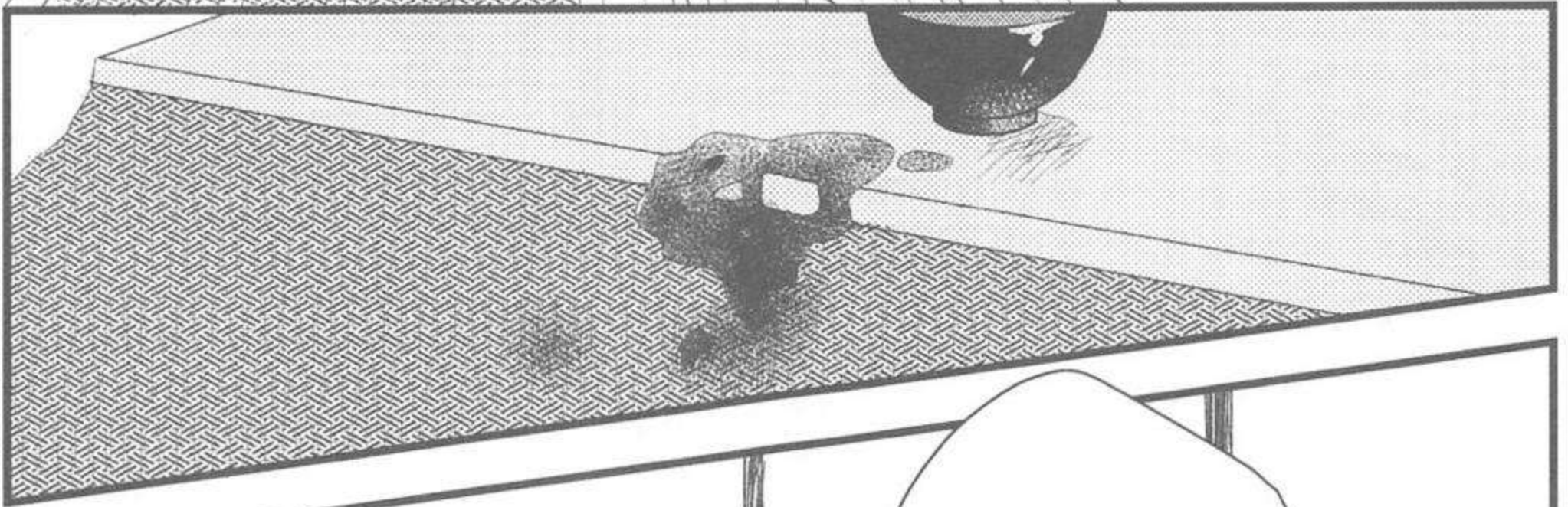
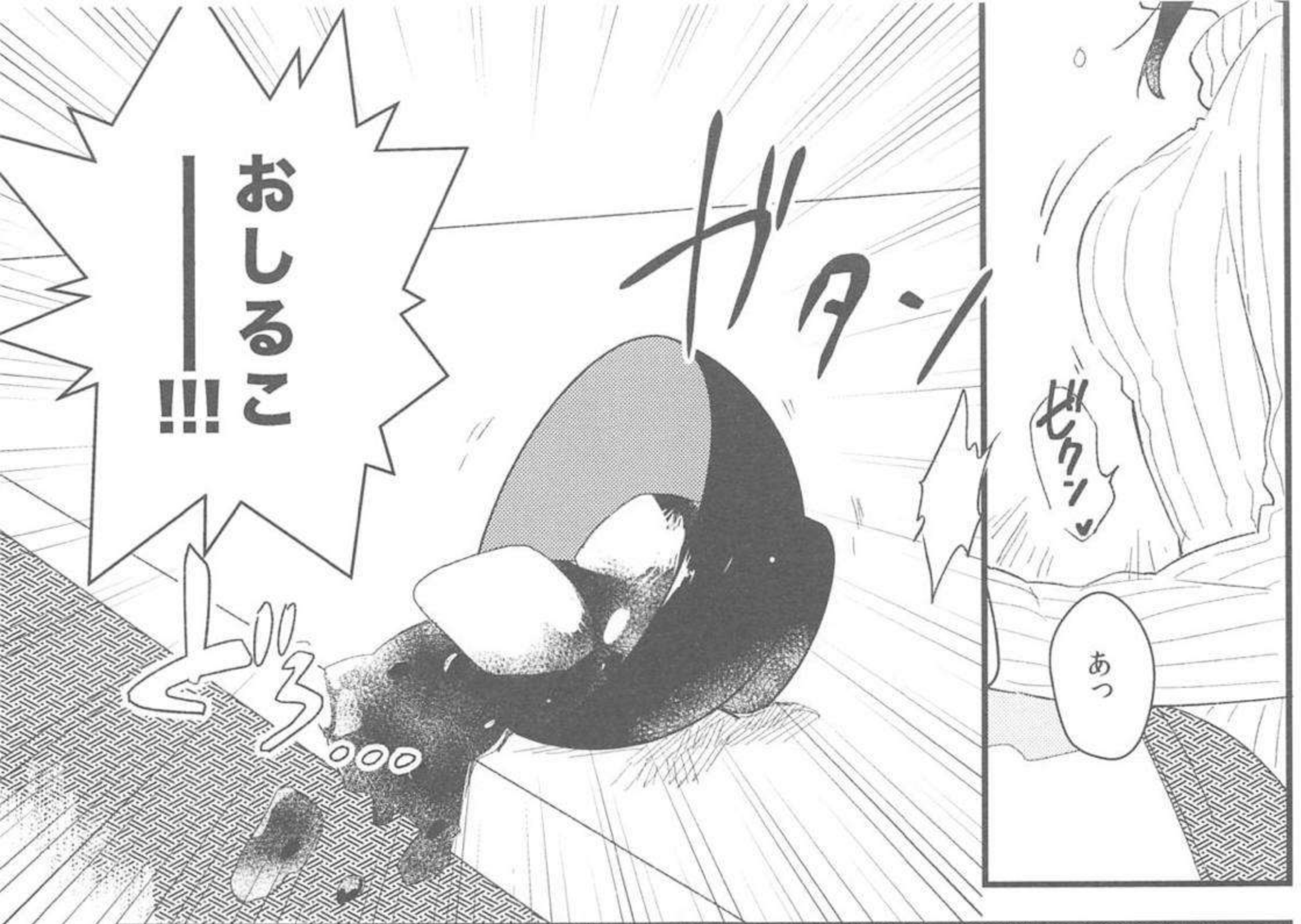


♡ もちにまつ婦本です。 ♡





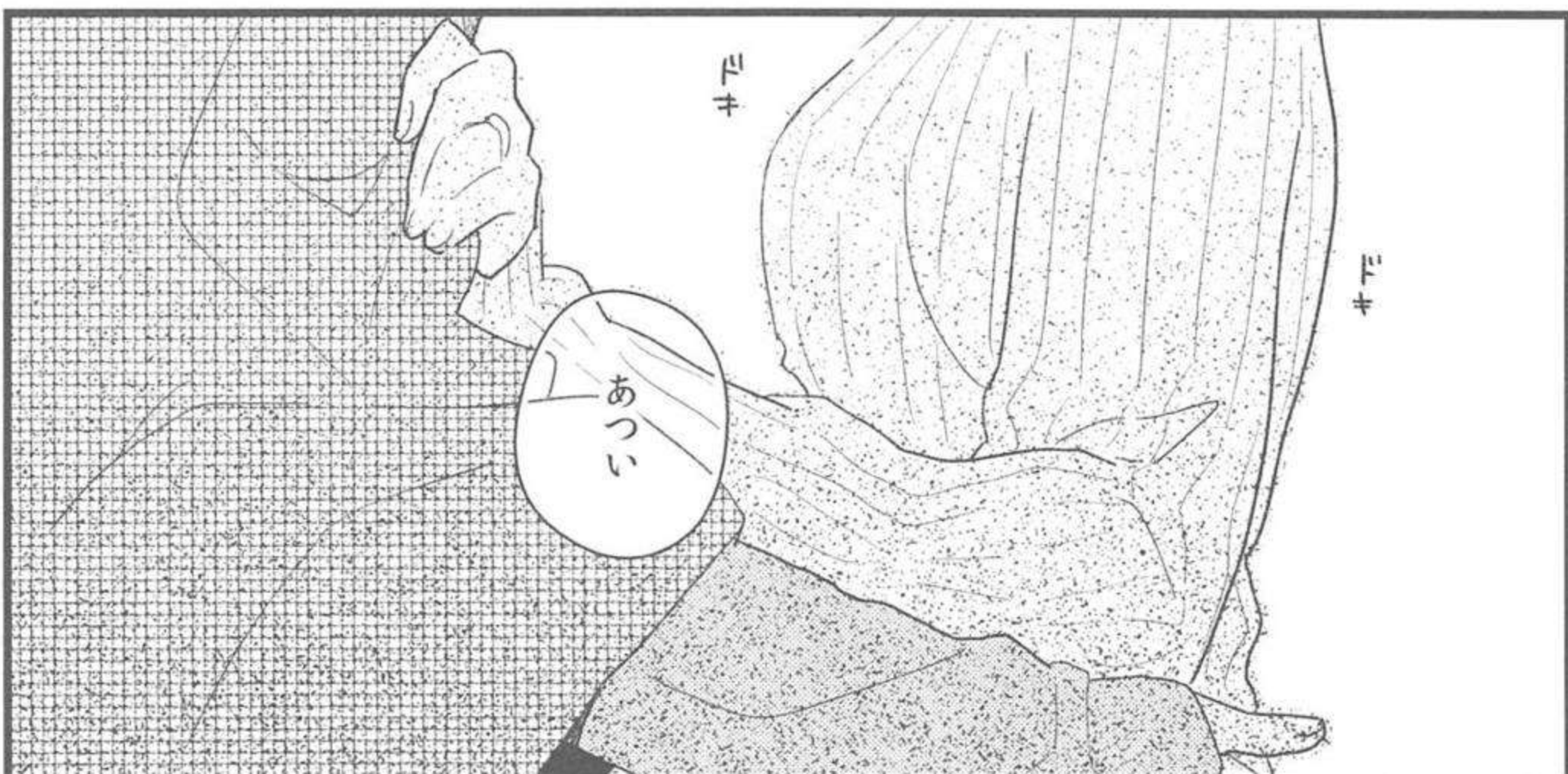
















?

ヤバイ?

おお

なんか  
これヤバイ



っぽい  
じゃねーよ

あまこ  
七草



…なんかもち蔵  
ヘンタイっぽい  
よ?

ば、ばか

エロッ

ハッ  
ハッ







結局  
こたつも半纏も  
汚しちゃったし



うおーっ



お汁粉ついできて  
あげるから  
ちよつとすみませんよ

えー



たまーっ

寒かったね  
よしよし



お？

たまごと  
暖まりたいんだけど

今は  
お汁粉より

おしくら  
まんじゅう  
する？

ちげーよ

◎こんにちは、ももせと申します。この度はお手にとつてくださりありがとうございます。ごきますす！もちたま本は8冊目です。

◎前々からもち蔵は結構暖かい格好してるのにたまこって薄着だよなあと思っいて、もち蔵が寒がりてたまこが暑がりなのとか萌える…みたいな感じで描きました。寒がりやさんのもっちーをあつためてあげられる存在になれて嬉しいたまこです。こたつにみかんみたいな感じのタイトルのつもりでしたけど、本編全く関係なくなつてしまいました…。いつものことでした。

◎前回の夫婦本で、また夫婦本出したい！濡れ場も描きたい！みたいなことを言つたらやっぱり描きたくなくなつて描いてしまいました。もちたま夫婦シリーズは自分も大好きなので、もっと色々描きたいです…！◎たまこ公式ガイドブック発売おめでとうございませす！ずっと待つてた！完全に聖書でしかないので、この本を人生の糧として生きていこうと思ひます。ありがとうございます。大好きです。

もちたま結婚おめでとう！

2014年冬▼ももせ





# Guest

お忙しい中、  
かたじけねえもちたま夫婦ありがとうございました！

---

◀ **みとんさん**

➡pixivID：5046

漫画を描いていただきました。

お忙しい中本当に本当に、ありがとうございます！！

胸開きタートルたまこと子作り最高です…。

◀ **明治さん**

➡pixivID：2543344

小説を書いていただきました。色々ご迷惑をお掛けしました><  
あったけえ素敵なもちたま夫婦ありがとうございました…！



布団に入り込んだ十二月の冷氣に肌をなでられて目を覚ました僕は、いそいそとベッドから起き上がり、寒さに震えながらリビングに向かった。

「あれ……こたつ？」

リビングには、昨日までなかった正方形のこたつが鎮座していて、僕は目をぱちくりさせた。

もぞもぞとこたつ布団が動いて、こたつの中から僕の奥さんがひよっこりと首だけを出した。

「あ、もち蔵！ おはよう」

「うお、たまこ！ もうこたつ出したのか？」

「最近急に寒くなったからね。ほら、早く入りなよ！ あったかいよ」

そう言つてたまこは顔をほころばせた。結婚してからショートカットにした髪がさらりと揺れ、朝日に照らされた顔の輪郭は淡くぼやけている。

たまこの白く透き通った微笑みにどこかほっとした僕は、たまこの隣に腰を下ろしてこたつに入った。途端にこたつ独特の温もりがじんわりと体に浸透し、寒さに凍えた手足がほぐされていく。

「うおー……あったけえ」

「だね、今日は一日こたつから出られないよ」

起き上がったたまこが僕と肩を並べて座った。

たまこは暖かそうな縦セーターを着ていて、僕はその可愛いらしいセーター姿に横目で見惚れてつ、こたつの絶妙な温もりが僕の体を骨抜きにしようのを感じた。

「この調子だと今年の冬もずっと、俺たちこたつに首ったけになりそうだな」

『いたつむり』ってやつだね！』

そうたまこが得意な顔で言った途端、僕はさつきたまこがこたつの中から首だけを出したシュールな光景を思い出し、吹き出してしまった。

「たまこたつむり……！」

「あー、もち蔵！ 何がおかしいのさ！」

お構いなしに僕が笑っていると、頬を膨らませたたまこが僕とこたつの間に割り込んできて、そのまま僕の足の上に座ってこたつに入り直した。

たまこの甘い香りが漂い、同時にセーターから色っぽいうなじが覗いて、どくんと心臓がはねた。

「おお、もち蔵のおかげで背中が寒くないな」

感心したようにたまこが言った。こっちはむき出しの背中が寒いし、柔らかいたまこの体が密着して、頭がどうにかなりそうだというのに。

「あの、俺はちよつと寒いんですけど」  
僕の抗議の声をたまこは「フフン」と一蹴した。

「しーらない。さっきの謝ったらどいてあげる」

「……まあいいや、じゃあ謝らないでおこう」

「ええー、何だよう、それ」

遠慮なくたまこにくつつける大義名分を得たのに、それをみすみす手放すと思ったか。

「寒いのも悪くねえな。たまこあったけえし」

たまこに後ろから抱き着き、小さな背中に顔をうずめると、こたつに温められたセーターの、春の陽気のような柔らかい香りが鼻を包みこんだ。

「もう」と嘆息したたまこだったけど、

「でも確かに、寒いのも悪くないかも」

と、お腹に回した僕の手に自分の手を重ねて、

嬉しそうに言った。

「こつやつてさ、遠慮なくもち蔵とくつついていられるからさ」

胸が大きく脈を打ち、背中にうずめていた顔を上げると、たまこは僕の足からおりていそいそと元の位置に戻り、恥ずかしそうに笑った。

はにかむたまここと目が合った瞬間、全身が粟立ち、猛烈に抱きしめたい衝動に駆られた。

僕がゆっくりと体を近づけると、意図を察したたまこも徐々に体を寄せてきて、やがて僕たちは正面から静かに抱きあった。

こたつとは異なる、優しい温もりで上半身が包まれる。抱きしめた腕の中で、時折乱れる息遣いに合わせて、たまこの体が小刻みに動く。昔より丸みを帯びた体と、少し膨らんだ胸の感触に、僕はのぼせあがりそうになる。

無言で抱きあうだけの行為だけど、こたつのヒーター音と僅かな衣擦れの音だけが響く、冬の朝の透明な空気の中の抱擁は、理由のはっきりしない幸福感を僕にもたらしてくれた。

「もちぞう」

囁いたたまこの声が僕の耳をくすぐり、「ん」と僕は短く相槌をうつ。僕も何か囁いてやろうかと思つた時、たまこの体が僅かにぶると震えた。

「寒いのか？」

「ちよつとだけ」とたまこが微笑を浮かべて抱きしめる手に力を込めた時、その僅かな圧力で、欲情をため込む僕の心のダムが音も無く決壊した。

「……もつとあったまる方法、あるぞ」

「え？」

僕はたまこから離れると、ゆっくりと肩に手をかけ、たまこを床に押し倒した。

仰向けに倒れたたまこの上に両腕を支えにしてこたつ布団と一緒に覆い被さると、たまこは僅かに目に戸惑いの色を宿らせて、僕を見上げていた。

「いやか？」

戸惑い続けるたまこの頬をそつと撫でる。やがてたまこも同じように僕の頬をゆっくり撫でると、とろんとした瞳で、消え入りそうな声で呟いた。

「……いいよ」

互いに顔を引き寄せ、間髪入れずに唇を合わせた。舌を絡め、がむしやらに唇を求めあつた後、服を脱ぎ、白くてきめの細かい肌が露わになったたまこの体に、僕は手や口を這わせた。

ほどよい大きさの胸は弾力の少ない心地のいい柔らかさがあつて、こたつの中に隠れたたまこの大事な所は、指を這わせるといつも以上にぐちよぐちよになつていた。

ピンク色の乳首を擦ったり吸ったり、とんでもなく熱い恥部に指を挿れる度に、たまこは体を震わせ、色っぽい喘ぎ声を出して僕を刺激した。

愛撫の間、何度もたまこが目が合った。桃色に頬を上気させたたまこは瞳を潤わせながら、「もち蔵……」と泣きそうな声で僕の名前を呼び、その度に僕はたまこと口づけを交わした。

僕たちは上半身を起こした後、さつきと同じ体勢でたまこは僕とこたつの間に割り込むと、こたつを支えにして腰を僕の体から少し浮かせた。

「寒くないか、たまこ」

「うん、大丈夫……」

僕は美術品のように完璧に整つたたまこの体に見惚れてから、小さなお尻に隠れているたまこの入り口に、硬くなつた僕の物をあてがった。

「挿れるぞ」

「……んっ！」

たまこのお尻に手をあて、ゆっくりと挿入した。たまこと繋がつた部分は溶けるように熱く、突く度にたまこの髪が揺れ、背中が美しくなつた。艶めかしい声で喘ぎ、僕の名前と「好き」という単語を頻繁に口にした。時折体を重ねる形を変えつつ、寒い部屋の中で全身を火照らして、僕たちは何度か、何度も求めあつた。

いやらしい行いなのに、寒い冬の日なのに。僕たちの周りは暖色に輝く空気で満ち溢れていて、暖かくて、果てしなく幸せだつた。

行為が終わると僕たちはこたつを布団がわりにして、裸のまま仰向けに寝そべっていた。余韻を噛みしめるように、呼吸が落ち着くまで僕たちはこたつの中で手を握りあつていた。

「そうだ、もち蔵」

不意にたまこが口を開き、少し身を起こして胸をこたつ布団で隠しながら、僕の方に向き直つた。

「冬らしく、このこたつの上に大福をおこうよ」

「待て、普通こたつと言えばみかんだろ」

女性らしい色っぽい仕草にどきまぎしつつも、僕は突っ込みを忘れない。

「えー、おもちでもいいと思うんだけどなあ。……」

「あ、思い出した！ 確か吾平さんってさ、みかん大福作つてたよね？」

「そういえばそれっぽい店にあつたかも」

僕が答えると、たまこの目がきらりと光つた。

「決めた！ 今日のもち蔵の家にみかん大福買いに行くよ！」

「えー、実家帰るのかよ。しかも外めちやくちや寒いし、俺こたつから出たく——」

不平を漏らそうとした口を、たまこが唇で塞いだ。唇を離したたまこは、呆けた顔の僕に「一緒にいれば寒くないよ」と満面の笑みで言った。

「わたし、あつたかいんでしょ？」

こたつから出て着替えを済ませ、玄関で靴を履き終えると、僕たちはぎゅつと手を繋いだ。繋いだ手から、たまこの優しい熱が伝わる。

相変わらずおもちに夢中なたまこ。変わらないたまこの絶妙な温もりに僕はいつも首つたけになつて、骨抜きにされてしまう。

そしてその温もりは、僕らの周りに漂うありとあらゆる物も「好き」に染めてしまうのだ。寒く凍える、冬でさえも。

だからたまこのことも、たまこと過す日々も、どうしようもなく愛しく思えるのかもしれない。

「いこつか、もち蔵」

「おう」

笑顔で先頭に立つたたまこが玄関の扉を開ける。空いたドアの隙間から冬の冷たい風が吹き抜けると、少し、春の匂いがした。

# Hearty Orange

発行日▶ 2014年12月28日

発行者▶ ももせ (hanada.)

連絡先▶ [info@hanada.sub.jp](mailto:info@hanada.sub.jp)

URL▶ <http://hanada.sub.jp/>

印刷▶ Tomato21PJさま

Special Thanks▶ みとんさん、明治さん

ゲスト参加ありがとうございます。

※オークションへの出品・無断転載等お断りいたします。

mochitama Fanbook  
hanada. 2014 winter

